

# 子ども研究のこれから

河合優年 難波久美子 佐々木恵 (武庫川女子大学)

## はじめに

子どもを取り巻く環境は21世紀に入って大きく波打っています。私たちが大きく揺れる地面の上にじっと立っていることが難しいのと同じように、子ども達は揺れ動く環境の中でゆらゆらと不安定になっているのではないのでしょうか。

ここで言う環境にはさまざまなものが含まれます。気候変動や、情報メディアの急速な発展による人間関係のスタイルの変化、社会の変化によってもたらされたと考えられる価値の多様化、少子高齢化などなど、私たちを取り巻いている実に多くの事柄が安定性を失っているように思われます。

安定性が失われること自体は、一概に悪いわけではありません。松尾芭蕉の「不易流行」が言っているように、変化し新しく作られる事柄はまた不易となるわけで、不易と流行は一つのものでもあります。問題はその変化の大きさと速さにあるのではないかと考えるのです。携帯電話は、わずか10年ほどの間に、移動電話から情報端末と記録装置を持つインテリジェント機器に変貌しました。このことが私たちにもたらした功罪は今日議論されているところです。

## 子どもの発達メカニズム解明の難しさ

このような環境の変化は、子ども達にどのような影響を及ぼしているのでしょうか。ブロンフェンブレナー (Bronfenbrenner, 2005) は、子どもの発達は、子ども自身の特性とともに彼らを取り巻いている環境との力動的な相互作用によって作り出されるとして、

生態学的な発達観を提案しています。養育者との関係性が子どもの発達に影響していることは誰もが疑いませんが、文化や時代が持つ価値観がさまざまな相互作用の過程を経て養育者に影響し、間接的に子どもの発達に影響していることは改めて言われなければちょっと分からないかもしれません。このような考え方は、世界経済の問題は子どもと直接的な関係を持たないと思い込んでいる私たちに、子どもと環境の関係についての新しい視点を与えてくれます。図1は、子どもを取り巻く環境を示したものです。家庭など、直接子どもと接しているマイクロシステムから、文化や社会が持っている価値観のように間接的に影響を与えているマクロシステムまで、子どもは多層的な環境の中で生きているのです。

しかしながら、子どもの発達と環境との関係を実証的に明らかにすることはそれほど簡単ではありません。そこにはいくつかの問題があるからです。その一つは、子どもの発達に影響を与えている環境要因がさまざまであり、それら全てを扱うことはできないということです。例えば、子どもにストレスを与える要因を考えてみてください。そこには、大気中の化学物質や騒音、温度など測定が可能なものから、母親との関係性のように、可視化することができない心理的なものまで無数にあります。この中から子どもの発達と関係する特定の要因を絞り込むことはそれほど簡単ではありません。なぜならば、それらは入れ子構造のように相互に関係しており、一つの要因の状態が変化すると、それにつれて子どももまた力動的に変化するからです。ここでは詳しく述べませんが、このような考え方は「アマゾンの蝶の羽ばたきが遠く離れたアメリカでの嵐に

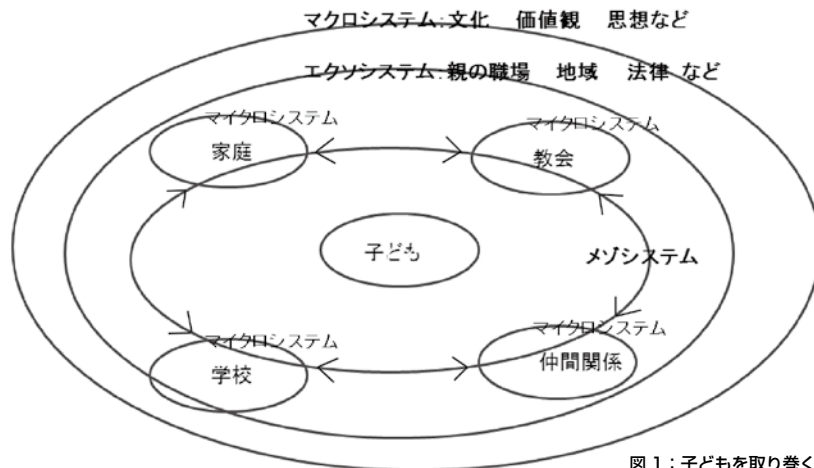


図1：子どもを取り巻く環境システム

つながっている」というような遠く一見関係のないものが複雑に関係し合っているのだという複雑系の考え方も通ずるものがあります。気になる子どもの姿が多くなってきたと言われていますが、それらはひょっとすると私たちが気付いていない、一見関係のない事柄によって引き起こされているのかもしれないのです。

環境との関係性を解明することが難しいもう一つの理由は、コホート効果というものです。コホートは、あるグループを追跡することと思われていますが、そこにはもう一つの意味があります。それは、特定の世代が持つ社会的背景要因の違いが発達に反映されるというものです。図2は2000年に誕生した子どもの発達の変化を示したものです。この子ども達は現在10歳を過ぎていますが、かれらは現在の社会環境の中で生きている子ども達ということになります。この子ども達は発達心理学的には児童期にあたる子どもであり、この時期はまた仲間関係との遊びが活発な時期ということになります。この発達の特徴は比較的安定性があり、文化や時代を超えた一貫性があると思われまます。では、2010年の子どもが示している仲間関係作りの特徴と、今から30年前の10歳の子どもが持っていた仲間作りの特徴は同じなのでしょうか。

答えは明らかです。携帯電話やインターネットなどが普及していなかった時代の子ども達の環境は、明らかに今とは異なっていました。この時代の子ども達は、対面状況での相互交渉が中心だったのです。このことは、同じ10歳を比較しても、その背景となる環境を考慮しなければ、かれらが示している行動の意味や原因が理解できないということの意味しています。先に述べたように、子どもの発達像は、子どもの持っている特性によってのみ決定されるものではないのです。子どもの育ちを時系列的に追跡する研究の必要性はここにあるのです。

これまで子どもの発達研究を進める場合に問題となることについて述べてきましたが、3つ目の問題は、それらの実行可能性と関係しているものになります。具体的に言いますと、子どもの研究を進めて行くためには膨大なコストとエネルギーが必要となるということです。図2に示されていますように、子どもの年齢による様々な活動について調べたい時には、20xx年の0歳からX歳までの子どもを横断的に調査すればその実態は把握できます。しかし、先に述べたように、それぞれの年齢群が持っている過去の経験や環境は同一ではありません。ですから、もしある年齢で特徴的な問題行動が起きていたときに、それが現代の社会環境がその年齢群に特異的に影響した結果なのか、それともその年齢群がかつてどこかの時点で交差した環境によって引き起こされているのかについては

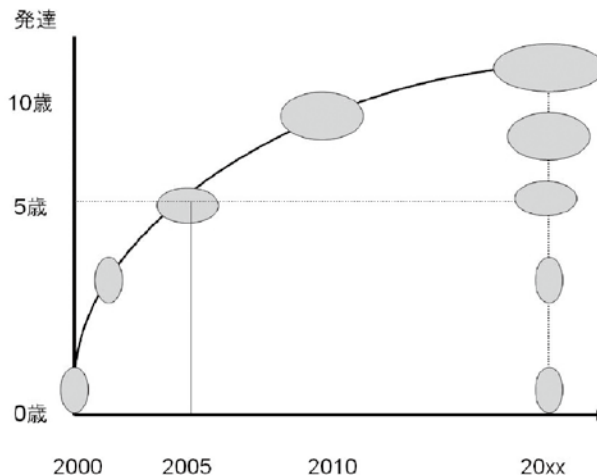


図2：生まれた時代による育ちの違いをどのように理解するのか  
同じ5歳の子どもの育ちを比較するのに、育った環境を無視することはできません。20XX年の子どもは今と異なる環境で生活しているはずで、それが子どもの育ちと関係する可能性は大きいのです。

分かりません。例えば、かつて大掃除の時などに毒性の強い DDT を手でまいていた世代や、食物添加物についても強い関心が払われていなかった時代に育った子ども達に、いま何らかの問題が起きたときに、それが老年期を迎える人間に一般的に起きるものなのか、それとも過去の曝露要因によるものなのかを確定することは容易ではありません。

このような個体を持つ要因と環境要因との相互作用の効果を確認するためには、縦断的な追跡研究が必要になります。このことによって、人間の生物学的な意味での固有性と、人間が作り出した文化という環境が作り出した固有性が切り分けられることになります。このためには、定点観測を続けるための組織が必要となります。しかし、残念ながら現在のところ、日本にこのような恒常的な発達研究の機関はありません。このため、子どもの育ちと環境についての資料は、個々の機関が有しているデータの重ね合わせになっているものと思われます。

コストと時間と得られる情報とのバランスが問題となるのですが、少なくともこれまで組織だった研究がなされて来なかったことは事実であります。種々の機能に関する縦断的データについてのクリアリングセンターの設置が必要と考えるのは私たちだけではないと思われます。

### 育ちと学びをつなぐということについて

これまで、子どもの発達を理解するための研究が持っている課題について述べてきました。ここではどうしてこのような発達研究が大切なのかについてのべることにします。

私たちは、誕生から死を迎えるまで、時間軸に沿っ

て一方方向的に変化します。この変化の中には、生得的に規定されている生物学的な特徴と、環境との相互作用によって作り出される後天的な特徴が含まれています。生物学的な特徴は、成長とか成熟という言葉で表現されるもので、個人差はありますが、世界共通に概ね同じような時期に同じような行動が出現してきます。これに対して、環境との相互作用で作られる特徴は、世界共通という訳には行きません。言語に代表されるように、文化や地域によって作り出されるものは様々になります。

子どもの発達を理解しようとする時には、行動の基礎として存在している成熟要因と、それを環境に合わせて適応のために作り出された後天的行動という二つのものを扱わなければなりません。例えば、私たちが普段なにげなく行っている言葉による相互作用も、発声器の成熟、音域の調整、音が持つ意味の獲得、意味するものと意味されるものとの関係、他者の理解というように、様々な下位要素が入れ子状になったものから成り立っています。これは、言語に限ったことではありません。非言語的な情動の理解や雰囲気を読むなどという行動なども、よく考えてみると、このような入れ子が見えてきます。

このことは、子ども理解のためには、生物学的な視点と心理行動学的な視点の統合が必要であるということの意味しています。育ちを理解して、その上にどのようにして新しい行動や情報が組み込まれてゆくのかを解明する、育ちと学びをつなぐ研究活動が必要なのではないでしょうか。

そのような意味から考えると、様々な研究領域を架

橋した複合学問領域として考えられている子ども学は、生物学的存在としてのヒトが、社会的存在としての人間になる過程を解明する重要な領域なのです。

## 子ども発達研究の実際

では、これまで述べてきたような視点からの子ども研究の実際について少し述べてみることにしましょう。このような複合的な追跡研究を進めるためには、研究推進のための経費、領域を架橋した研究者組織、膨大なデータを管理する物理的環境、そしてなによりも長期間にわたって協力していただける研究協力者の方々が必要となります。ここでは、武庫川女子大学子ども発達科学研究センターでの研究を例に、研究の実際について述べてみることにします。

子どもの研究センターでは、いくつかの研究活動を進めています。その一つに乳児期から児童期に至る発達過程を追跡しているものがあります。これは上述した縦断的研究に当たるものになります。この研究で協力していただいている母子は、2009年3月に終了した、独立行政法人科学技術振興機構（JST）「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明研究（JCS:Japan Children's Study）」の参加者のうち、先の研究の終了後も追跡研究にご協力いただけることに同意していただいた方々です。ここでは、子どもと養育者の両者について縦断的に追跡し、現代の子どもの発達の变化をその環境を含めて総合的に捉えようとしています。研究組織は、小児科、臨床心理学、行動発達学、感情心理学、教育心理学など複合的な領域の

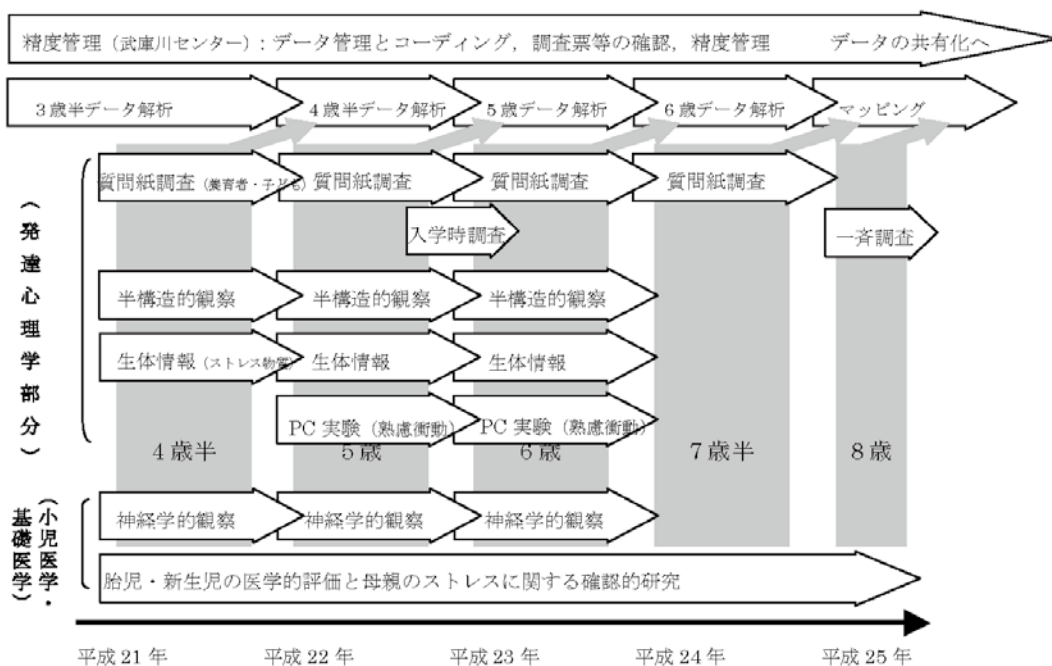


図2：武庫川コホート研究の検討領域とタイムライン

研究者から成り立っています。

この研究の独自性は、子どもの発達を心理学的・医学的な側面から個体と環境要因を多元的に捉え、分析しようとしているところにあります。研究の流れについての概要を図示したものが図3に示されていますが、ここには研究組織図が含まれていません。組織を含めなくてもこのような複雑さになるのです。ここに、発達を多様な要因を含む環境との相互作用として追跡していく研究の難しさがあるのです。

研究は三重県と兵庫県で進められています。協力者は150名程度ですが、この規模の研究遂行において、研究者が8人、事務的マネジメント2名、研究補助者が17名必要となっています。ここにコストと人的な資源の大きな負荷が示されています。もちろん、このためには予算的な裏付けが必要となります。現在すすめているこの研究は、科学研究費基盤研究(A)(課題番号21243039)による研究費補助を受けています。また、個人情報を含むデータの厳重管理スペースや分析のための作業スペースなどを含めて、建物の2フロアを大学から貸与されています。研究を進める上での不安定さは依然として残っています。

本研究は従来の調査法に加えて、小児科医と発達心理学者による診察・行動観察のビデオ記録を前方視的に蓄積・分析している点に特徴があります。また、協力者の同意のもとに、保育園・幼稚園の協力による家庭外の社会的行動の評価などを行い、生得的な特性と環境との相互関係を明らかにしようとしています。一人一人のデータをトレースすることによってのみ見えてくる、個と環境との相互作用が作り出す個人差の解明を目指しているのですが、このような研究の大変さは残念ながらあまり知られていません。研究への理解を得ることが必要なのです。

## 研究への理解を得るために

武庫川女子大学子ども発達科学研究センターの研究は、ごく小さな追跡研究ではありますが、これにおいてもその組織は大きなものになっています。このような問題に加えて、もう一つの難しさがあります。それは時間です。加齢にともなう変化を追跡して行くと、当然のことですが、研究者自身も加齢して行くことになります。これは縦断研究の宿命であります。もし今年誕生した子どもが50歳になるまで追跡しようとする、研究者は少なくとも50年以上は現役の研究者として生きていなければならないということになります。これは実際には不可能に近いことになります。

本論文のねらいは、長期追跡研究の意義と難しさを示すということにあったのですが、結論に近くなり、

内容はかなり悲観的なものになってきました。つまり、長期の追跡は個人の研究としては難しいということなのです。

華々しい最新科学の研究に比べて、時間軸に沿った個人の発達の的な変化をトレースし、発達のモデルを作っていくという作業は地味で、すぐに効果が見えないものであります。しかし、急速に変化する諸環境の中で、子ども達がどのように発達のコースを変えてゆくのか変えないのかを知ることは、予防的にも治療的にもそしてなによりも、子どもの育ちと学びの過程を私たちが理解するために重要であると考えます。

書物に書かれる子どもの一年は数ページかもしれませんが、彼らの1年は365日かかります。その中でゆっくりと自分を取り巻く環境を確認し、自らを変化させていきます。子どもを理解するためには問題行動だけでなく、普段の何気ないやりとりの記録が重要なかもしれません。

縦断研究の意義を理解して、その価値を理解してもらうためには成果が必要となります。しかしその成果を示すためには研究を進めなければなりません。循環論が起きてしまいます。継続的に子ども達を追いつけるセンターの設置がこの問題を解決すると思われま。研究者が一堂に会してデータを共有し、意見を交換しながら発達を解明する、そのような機関が待ち望まれます。

## さいごに

子どもは未来につながる宝です。かつて私はアメリカの雑誌に書いた論文の最後に、「There is no place in our society for such self-destructive thinking as “I did not want to be born” or “There is no joy in this life.” We have the obligation to act, to do more than talk. (Kawai,2009)」という文章を載せました。「生まれてこなければよかった、楽しいことはなにもない。」というようなことを子ども達に思わせないために私たちは何をすればよいのでしょうか。

私どもの子ども発達科学研究センターが、子ども理解のための基礎研究と子育てや教育という実践活動を結びつける「子ども学」の基幹組織として研究に寄りできればと思っています。

### 〈文献〉

- Bronfenbrenner,U. 2005 Making human beings human: bioecological perspectives on human development. Sage Publications,Inc.  
Fogel,A.,Melson,G.F., 1987 Child development: child,family,society. West publishing company. MN.  
Masatoshi Kawai 2008 Child Honoring: A Systems Approach Journal of developmental processes,2008,Vol(3),2,52-55.